

# 世代の観点からみた家族社会学セミナー

森 岡 清 美

本稿は元来、一九九一年七月二一日の日本家族社会学会設立を記念して行うべき講演の原稿として、準備されたものである。聴講者の関心を考慮に入れた結果、講演には別に用意した「日本家族の現代の変動」と題する原稿を用い、こちらは空しく匡底に眠ることになった。しかし、本稿には日本における家族研究史の一側面を記録した学史的な意味があることを想い、この度敢えて公表させて戴くことにした。

本日、家族社会学セミナーが解散し、その基礎の上に新たに日本家族社会学会が設立されました。こうして、日本

全国の家族研究に志をもつ人たちの研究協力が一層促進される機運を迎えましたことは、ご同慶の至りであります。セミナー発足の最初から格別のかかわりをもった一人として、ひとしお深い感慨を覚えます。セミナー代表世話人の望月嵩さんから、設立総会につづく記念講演のご依頼をいただきました。まことに光栄でありまして、セミナーとの浅からぬ因縁を回想し、微力ながらお受けさせていただいた次第であります。

家族社会学セミナーは、一九六八年（昭和四三）八月、第一回のセミナーをもち、この度、第二四回のセミナーを日本家族社会学会のために準備して幕を閉じました。閉幕、

解散ということは、個人でいえば死亡であります。お葬式では弔辞が読まれ、故人の生涯の総括がなされます。そこで、私も家族社会学セミナーの総括をしてみたい。発足以来すでに二三年、その間一年も欠かさずセミナーを開いてきました。人間の一生とすれば短く、夭折というほかありませんが、一個の活動体としては、総括に備する年月を経ていると申してよいと思います。セミナーの総括とは、日本の家族研究史に照らして家族社会学セミナーの意義を考へることではなければなりません。しかし最近、世代の問題に関心をもつ私は、とくに世代の観点から、一つの総括を試みたいのです。今回ご出席の皆さんのなかには、セミナー発足の頃生まれ、研究者たらんとしてここにお集まりの方々もおいでだと思います。年寄りの懐旧談にならないよう戒心しながら、過去の思い出を交えてお話ししてみましよう。

(一) セミナーは、研究情報交換の場となり、研究成果の関連づけを促進することによって、参加者の協力のもとに研究水準の向上を図る運動であること。

家族社会学セミナーは、東京オリンピック開催の翌年、

一九六五年(昭和四〇)九月に東京で開かれた第九回国際家族研究セミナーの、強烈なインパクトの下に発足しました。したがって、国際家族研究セミナーのことからお話しなければなりません。

国際家族研究セミナーの母体は、国際社会学会の家族研究委員会 (USA's Committee on Family Research) でありまして、委員長のはル教授 (Hill, Reuban) の指導と援助と激励のもとに、その第九回セミナーが小山隆先生(ときに六五歳)を組織委員長として準備され、開催されました。組織委員としては、喜多野清一(六五歳)、牧野巽(六〇歳)、岡田謙(五九歳)等ほぼ六〇歳台前半の長老の先生方に加え、山室周平(五六歳)、山根常男(四八歳)、青井和夫(四五歳)、中野卓(四五歳)といった四〇歳台の諸先生が名を並べ、最年少の私(四二歳)が事務局を担当したのであります。東京およびその周辺に住む家族研究者が結集して、セミナーを準備したことが、この顔ぶれで分かります。実働部隊は小山先生率いる家族問題研究会(昭和三〇年発足)の会員諸氏でありました。

海外からは当時の第一級の家族研究者が参加しました。名前を挙げてみますと、ベルギー・ルーバン大学のピエー

ル・ドゥ・ビ、フランス・国立科学調査センターのアンドレ・ミッシェル、ドイツ・ケルン大学のルネ・ケーニツヒ（国際社会学会会長）、イスラエル・ヘブライ大学のヨニナ・タルモン、オランダ・農業大学のゲリット・クイー、ノルウェー・オスロー大学のエリック・グレンセス、イギリス・コミュニティ研究所のピーター・マリス、ソ連邦科学アカデミーのハルチエフ、とヨーロッパは各国一名ずつですが、やはりアメリカ合衆国は多く、委員長ミネソタ大学のルーベン・ヒルを初めとして、ミシガン大学のロバート・ブラッドおよびユージン・リトウオック、国立精神衛生研究所のウイリアム・コディール、コーネル大学のエドワード・デベロー、スタンフォード大学のジョン・フィッシュャー、コロンビア大学のウイリアム・グード、ボストン大学のジョン・モギー、ミネソタ大学のムレー・ストラウス、ウエスタン・リザーブ大学のマービン・サスマン、ノース・ウエスタン大学のロバート・ウインチ、といった錚々たる顔ぶれでした。よくこれだけ広く代表的な学者の参加を確保できたものと、参加者リストを見て改めて感に堪えません。日本へ行くことの珍しさということもあつたかもしませんが、偏にヒル教授の声望と、その斡旋によつてフ

ォード財団から渡航費の助成がえられたことによるものと、私は考えております。

このセミナーは、日本ユネスコ国内委員会と日本社会学会の共催により、九月中旬一週間にわたつて行われました。開催費用を調達するのが大問題で、そのために日本ユネスコ国内委員会に渡りをつけたのは、小山先生であります。日本社会学会は資金がありませんから、共催といっても専らモーラル・サポートに止まり、有体にいえば名を連ねただけでした。しかし、国際家族研究セミナーは、日本社会学会の名で開催する最初の国際会議でありましたから、家族研究を専門としない社会学者も大いに期待と関心をもち、欧米からの参加者がそれぞれトップ・クラスの専門家であることもあつて、日本の有力な社会学者が会場に姿を見せてくれました。主な方々としては、高田保馬（八二歳）、綿貫哲雄（八〇歳）、新明正道（六七歳）、武田良三（六七歳）、尾高邦雄（五七歳）、福武直（四八歳）の諸先生を挙げることができます。

セミナーの運営のために多くの先輩・同僚の協力をえましたが、結局のところ、小山先生が全体の総括と財務を担当され、私は企画・庶務、そして外国参加者との通信によ

る折衝を担当しました。一日に二〇通もの外国あて書簡を書いたことさえあります。セミナーの準備と運営に夥しい時間とエネルギーを投入した代わりに、小山先生より二三歳も若い私が、もつとも甚大なインパクトをセミナーから受けたのではないかと思います。

セミナーが終わったあと、国際家族研究セミナーに範をとった、日本家族研究セミナーとでもいふべき研究会議が、われわれにとって必要である、という実感のようなものが、私のなかに重いおりとなつて残りました。会議の形式としては、一週間とはいかなくてもせめて二―三日、合宿して研究発表と討議を行うこと、会議の内容としては、単なる研究発表ではなく、出席した専門家が相互に学びあい啓発しあえるような、討議の比重の高いものであること、したがって数十人を越えない専門家の会議、というイメージが結晶し始めていました。

翌一九六六年九月、私はフランスのエヴィアンで開催された世界社会学会議に出席し、家族研究委員会が組織したセッションで研究報告の機会をもつとともに、前年東京のセミナーに出席した人たちと再会して意見を交換することができました。そのなかで、家族研究は今や命題の提出と

検証の時代に入っていること、これまで個々バラバラになされてきた研究活動を相互に関連づける必要があること、そのための情報交換を促進する場としてセミナーを開く必要性が大きいこと、を痛感させられて帰国しました。早速、家族問題研究会の一〇月の例会で、「国際社会学会に出席して―家族研究の現状と動向―」という題で報告し、国内の研究協力体制を整えることが、今後国際的比較研究に乗り出すために不可欠であることをアッピールしました。私の提案に少なからぬ共感がよせられたことを記憶しています。

同じ一〇月のことですが、それよりちょうど一週間前、日本社会学会の大会が明治学院大学で開かれました。休憩時間に山根常男さんと雑談していた時、国際家族研究セミナーをモデルとして、来年夏期休暇中に社会学セミナーを開きたい、については協力してくれないかと頼まれ、成り行きで引き受けてしまいました。それが、一九六七年(昭和四二)八月上旬、長野市の郊外飯綱高原で開かれた第一回社会学セミナーであります。多数の受講希望者がありましたが、宿舎の収容能力の関係から三二名にしぼり、一〇人の講師を招いて六日間、集中的な講義と討議がつけられ

ました。受講者のなかに望月嵩さん、石原邦雄さんなどがおり、チューターの一人として本村汎さんが協力してくれました。そのさい私が担当した最終講の「社会学方法論」は、後に「理論構成への接近」と題する論文にまとめられました。その末尾で、理論構成の要件の一つとして、研究者の断片的散発的な活動を組織化することの必要性を指摘し、具体的な一つの試みとして、専門分野別セミナーの開催を挙げております。

こうして、セミナー発足の構想が固まってゆきました。一九六八年七月、折しも火の手上がった大学紛争のため、私が当時勤務していた東京教育大学の社会学研究室が学生によって封鎖された不自由ななかで、辛うじて準備を整え、八月上旬、八王子の大学セミナーハウスを会場として、第一回セミナーの開催にこぎつけました。「家族社会学の成果と課題」をテーマとし、四三名の参加がありました。

以上の経過説明をとおして、私が何を目的としてセミナーを発足させたか、ご理解いただければ幸いです。学会、研究会はいくらもありますが、ただ今説明したような意図をもって発足した研究会は、ほかに例がないのではないかと思います。数十名の専門家による、専門家の

ための研修会という性格は、セミナーが多数の参加者を迎えるようになるにしたいが、希薄になつてゆきましたが、現在でもその名残はあちこちに見ることができます。参加希望者に最近の発表論文目録の提出を求め、という慣行はその一つであります。

(二) セミナーは、家族研究者の全国的交流を図るとともに、世代間交流の促進を意図する運動であること。

家族社会学セミナーは家族問題研究会を苗床として発足しましたが、研究会のほうは東京およびその周辺在住の家族研究者を主要なメンバーとする、一種ローカルな活動でありました。これにたいし、セミナーは最初からローカルな制約を越えようとしていました。もちろん、初めから全国的であることを志向したわけではありません。とりあえず研究者の多い関西に目をつけて、京阪神在住の家族研究者を運動のなかに取り込もうとしたのであります。第一回セミナーの世話人は関東・関西同数の二名ずつであり、報告者八名の内訳はこれまた両地区同数の四名ずつであること、さらにセミナー報告書『現代家族の社会学——成果と課

題―』(培風館)の編者も両地区から一名ずつ出ていることに、この意図が明瞭に示されています。東京中心になることを避けて、東京地区と京阪神地区という二つの中心をもった楕円型の運動にしようとする素志は、一九七〇年(昭和四五)、第三回セミナーが故増田光吉さんのイニシアティブのもと大津市で開催されたことにより、形のうえで一挙に達成されることになりました。この意味で、増田さんは家族社会学セミナーが全国的な運動になる最初の転機をつくってくださった、セミナーにとって恩人というべき方です。

その後、参加者の地区別人数の関係で、東京地区で二回開いて、京阪神地区で一回といった交替制で推移しました。一九八四年(昭和五九)、第一七回セミナーが四方寿雄さんのご尽力で名古屋地区で開かれ、楕円の二つの中心の間が埋まってきました。さらに一九九〇年(平成二)、第二三回セミナーが篠崎正美さんのお世話で福岡市で開かれ、楕円の二つの中心の外に出る広がりをもつに至り、全国的な運動にしたいという本来の願いが達成される時代が来たのであります。

つぎに、世代間の交流を促進するという意図は、第一回

セミナーの最終日に、「家族研究の回顧と展望」というテーマで小山・喜多野・牧野・岡田四先生をシンポジストとして登壇願った企画に示されています。実際には、喜多野先生はご都合がつかぬため、後日紙上参加をお願いし、セミナーでは残る三先生の鼎談ということになりました。第二回セミナー以降も、これらの先生方には一般の通知とは別にご案内の手紙を出し、お出でいただいた時にはセミナー終了後私のほうでお礼状を差し上げることにしていました。

東京にいますと、とくに私のような立場では、これらの先生方のお話をうかがう機会が少なからずありましたが、若い方々、とりわけ東京地区以外の若い方々には、あまりそうした機会がないのではないかと思われました。しかし、これらの大先輩の研究業績を学び、これを批判的に継承してこそ、日本の家族研究の発展を期しようと考えた私は、多くの若い研究者がこれら先学の言葉に直接ふれる場にセミナーがなることを、願ったのであります。そして、私たちが中年世代が老年世代の先生方を若い世代につなぐ橋渡しにならなければ、と思いました。

因に、第一回セミナーの報告者(R)、司会(C)、シン

ボジスト(S)、編者(E)の年齢を調べてみますと、当時四四、五歳から五〇歳前後の者が、六〇歳台の大先輩と三〇歳台以下の若い世代を繋ぐ立場にあったことがよく理解できます。

S 小山(六八歳)、S 喜多野(六八歳)、S 牧野(六三歳)、S 岡田(六二歳)、E 姫岡勤(六一歳)、E 山室(五八歳)、C 那須宗一(五四歳)

R 山根(五一歳)、R 上子武次(五一歳)、C 青井(四八歳)、R 田村健二(四五歳)、R 森岡(四五歳)、R 増田(四四歳)

R 光吉利之(三八歳)、R 湯沢雍彦(三八歳)

大先輩のうち、小山先生は中年世代の何人かと密接な関係がありましたから当然として、ほかの先生方はどうでしょうか。喜多野先生は小山先生に引つ張られて、セミナーに関心をもつてくださったところがあります。岡田先生は私との関係、牧野先生は岡田先生を介する間接的な関係、姫岡先生は上子・増田両氏との関係が直接の太い絆だったように思います。姫岡先生以外の四方は、いずれもなんらかの意味で戸田貞三先生の学統に属し、家族を小集団と見るか、少なくともこの立場に理解をもつ方々でした。したがって、戦後のアメリカ社会学の影響を受けとめやすく、

その点で中年世代およびそれ以下の若い人たちとも、親近感をもちえたのではないかと思えます。

この当時、有賀喜左衛門先生は七一歳でしたから、大先輩の筆頭格としてシンポジウムにご招待すべきだったし、中野卓氏は四八歳でしたから、まさに中年世代の一人として加わっていたであろう努力すべきでした。このお二人とかつて、あるいは現に同僚であった私とその斡旋をするべきところ、いろいろな事情で出来なかつたことを遺憾としております。両氏を招き寄せることは、いくらか努力しても結局成功しなかつたと思いますが、そのために、日本の家族研究の重要な一翼を代表した、家族を制度体 *Institution* ととらえる立場、また家族を地域共同体や全体社会の構造の一部として扱う立場が、このセミナーでは弱くなる、ということになったように思われます。この点は、日本の家族社会学全体の弱点として指摘されていますが、今後とくに留意していかなければならないと考えるものであります。

(三) セミナーは元来、研究者自身の研修のためのイベント、およびそれを担う運動であつて、持続的な組織体ではなかつたこと。

第一回から第二〇回までの家族社会学セミナーは、学会でも研究会でもなかつたのであります。家族研究者の同志的結合が担う運動であつて、それが毎年一回セミナーを開催してきた、というのが実態です。したがつて、常連はいるけれども、会員といつたものはなかつた。セミナーのさいの総会で選ばれた方々が世話人となつて、翌年のセミナーを企画し、関心をもつと思われる人たちに案内して参加者を募集し、セミナーを開く、ということの繰り返しであつたのです。

二〇年もの長い間、何故このような、ルーズな組織にしておいたかという点、インフォーマルな組織の気楽さ、事務量の軽さをよしとしたからであります。組織体にして会員をもちますと、会費を徴収しなければならぬ。ところが毎年未納金が出ますので、その徴収と未納者の処置をどうするか、ちよつとした問題になり、そのために確実に事務量がふえます。研究会を開催するには事務は不可欠

ですが、研究者が事務を分担するほかに以上は、出来るだけ事務を減らして、事務局の負担を少なくしたい。それには、毎年募集して参加費を貰い、セミナーを開くことによつて参加費に見合うサービスをし、会費未納による売りかけ金や会費前納による預かり金が残らないようにしたわけであります。

それに、持続的な組織体にしてしまうと、事業としてシンポジウムや大会を催して人が集まるうちはよいが、参加者が少なくても謳つた事業はやらねばならない、ということになります。関係者のニーズに押しされて催すのではなく、ニーズがなくなつても、組織体を存続させるために事業を行ふ、といった事態が起りえます。その点、セミナーは翌年開催の希望が少なければ、直ちにやめることができず。一時中止か廃止かは別として、関係者のニーズの推移に柔軟に対応して、いつでもやめることができる気楽さ、裏返していえば毎回最終回になる危険をはらむことが、世話人側の活力、そして一般参加者側の自発的参加と協力を動機づけたかもしれません。

それなら何故、第二一回セミナーから会員制にし、したがつてセミナーといひながら、その実、持続的な団体つま

り学会になり、今回名実ともに学会となったのでしようか。この点は、セミナー改革委員会で十分に検討されたところであつて、ご記憶の方も多いと思います。セミナーはインフォーマルな組織としての気楽さ身軽さを身上としましたが、他方、二年くらいの短期計画しかもつことができませんでした。毎年、来年のセミナーを開くかどうかから議論していただのでから、短期の計画すらもつことができなかったのであります、二年にわたる計画さえ、セミナーが例年開催されることが暗黙の了解事項となつてからのことでした。しかし、もう少し長い、中期計画ともいえる将来展望をもつことは、セミナーでは不可能であります。

一九八五年（昭和六〇）、東京・吉祥寺の東急インを会場として開かれた第一八回セミナーのさい、改革委員会が発足することになりました。その頃には毎年百名を越える参加申し込みがあり、会場の収容能力の關係で、百名を越えた分をどうするか、世話人が苦慮されたものであります。これは、セミナーをむしろ恒常的な組織に編成しなほして、機関誌をもち、将来展望をもつた研究団体にすべき時機が来たことを、示唆していたようにも思われます。改革委員会はこの隠れた動向をあらわな要請としてつかみ出し、五

年有余の検討と準備の末、いよいよ日本家族社会学会創立の運びに至りました。セミナー時代の身軽さはなくなり、事務量が増えましたから、正岡寛司さんが事務局長としてたいへんな負担を担ってくださいます。機関誌も石原さんたちのお骨折りで二年前に創刊され、今回第三号の刊行を見ることができました。有り難いことであります。

組織としてはインフォーマルでルーズな運動がフォーマルな組織になるのは、運動が成功裡に持続拡大した場合、一種必然の展開であります。そのことは、すでに六五年ほど前、ドウソンとゲッティスが『社会学入門』の一節で、社会運動の展開あるいは自然史として述べております。私の考え方からすれば、社会運動のライフサイクルというべき発想であります。セミナーはライフサイクル初期の段階から公式化の段階に歩みを進めたわけでありました。下世話な比喩を用いることをお許し願うとすれば、同棲から結婚に進んだ、ということになります。同棲の身軽さはなくなり気楽さも減りますが、結婚が約束する安定をえて、家族ライフサイクル計画とまでいかななくても、ある程度の将来展望のもとに事業を企画することができるようになりました。この利点を大いに生かして、日本の家族研究の発展

のために意義ある貢献ができるようにと願わずにはおれませんが。

#### (四) 世代交替の問題―リーダーシップの世代交替について―

運動体も組織体も、発足以来二〇年以上たてば、リーダー層の世代交替が課題となつてきます。これをいかに適切に遂行できたかが、後日の発展を規定するといつて過言ではありません。なかには、世代交替ができなくて解散してしまつた研究会もあります。

私が即かず離れずの関係をもつた研究会に、宗教学会研究会というのがあります。一九七五年(昭和五〇)年末、会員を若手研究者に限つて発足しました。若手というのは四〇歳未満のことです。これは、大学紛争期を特色づけた運動の世代的構成の流れに属するものと理解されます。しかし私は、研究会がその成員資格を年齢で限るのは、女性はいけない男性ならよいと、性別の制限を設けると同様に、研究活動というものの性格からみて間違つているのではないか、と思ひました。性・年齢・国籍のいかんを問わず、関心のある人々に広く開放されていなければならぬ。

もちろん、不慮の事故を予防するために、入会にあたり会員の紹介を条件とすること、それから、会の維持のために会費の納入を条件とすることも、止むをえないことであつて、この程度の制限ならむしろ必要なこととして支持されるし、事実、支持されています。

大体、年齢制限をつけなくても、なにか特別の理由でもない限り、あまり年とつた人は加入しません。若い人は先輩に連れられてきますが、老人は遠慮してかどうか、ともかく来てくれません。むしろ、年とつた先輩を引き寄せるために特別の努力がいるのです。私の経験で恐縮ですが、長老の先生方にはセミナーの企画を同封した招請状を送り、ご出席になれば早速ご挨拶してセミナーの現況などご報告し、終つた後お礼状を出しました。そんなことが数回に及んだのであります。そうでもしなければ年配の先生方は、若い者が中心になつてやつている集會に、わざわざ時間を割いて来てくださいません。年齢制限などつけないとも、年配の人が若い者の集會に来て、かきまわすような心配はないのです。それは、年配の人たちが若い人たちが想像する以上に思慮深いからというより、若い人たちのお節介をやくよりも、もつと面白いことがほかにあるからだ

と思います。

私はかねがね、宗教社会学研究会の主要なメンバーが四〇歳を越えたらどうするのだろうか、と思い、興味をもって眺めていました。発足から一〇年余りたつて彼らが五〇歳に近づいた頃、解散するという話が伝わってきました。そのうちに、解散記念シンポジウムを開きたいので、「研究対象としての宗教」のテーマで社会学の立場から基調講演をしてくれないか、という依頼が届いたのであります。

四〇歳を越えた者が退会することで研究会を持続させる道がありうるのに、この道をどうして選ばなかったのだろうか、というのが私の疑問でした。この疑問にたいする解答を見付けたいという気持ちもあって、すぐに講演の依頼に応じたのであります。会場で耳にしたのは、研究会のなかの若い会員から、四〇歳を越えた幹部にたいする不満が吹き上がったということでした。どんな不満かという点、宗教研究に伴う悩みを話題として取り上げてくれないという不満だそうです。こういう悩みは研究に本格的に従事する以上なんとか自分なりにケリを付けて、研究会の討論などには持ち出さないものです。まるで漬垂れ小僧の泣き言のような突き上げに、幹部たちは嫌気がさして研究会を投げ

出したということでした。これを聞いた時に、会員を四〇歳未満に限ることを正式に謳い、三〇歳台の研究者の同志的結合を誇った代わりに、年配の人たちとどのように付き合うか、そのノウハウがこの研究会の運営プログラムには欠落していた。そのため、自分たちが年配になった時、若い人たちから自制を欠いた要求を突き付けられることになったのではないか、と思いました。同世代の同志的結合で運営した半面、世代間継承の技術を欠き、世代交替がでずに解散に至ったのであります。

この点、セミナーは最初から世代間の交流を意図していました。大学紛争が激化した年に発足しましたが、石原さん始め大学院クラスの若い研究者が何人も参加してくれました。六〇歳台の先生方については先にふれたとおりであります。さまざまな年齢階層を含むことよって、研究の世代的継承を促すとともに、リーダーシップの世代的交替を容易にする潜在的能力を備えていたように思います。

では、セミナーのリーダーシップの世代交替はどのように行われたのでしょうか？ それは、一九八五年（昭和六〇）の第一八回セミナーのさい改革委員会を発足させ、そのメンバーを五〇歳未満に限ったことが第一歩でした。以後、

れますよう期待するものであります。

二年の歳月をかけて、あるいはセミナーのリーダーとみなされてきた年配の人たちの意見を聞き、あるいはセミナーの度毎に参加者の意見を徴し、根気よく検討に検討を重ねて、結局、今日見るような学会への脱皮という結論に達し、その青写真に即して一步一步上りつめてきたのであります。この過程で、今や老齢の私たちが創ったセミナーを、五〇歳台半ば以下の若い方々が作りかえて自分たちのものにした、といえます。今回の学会創立は、セミナーの世代交替が継承と創造の両面を含みつつ、見事に達成されたことを内外に宣言するものでありまして、まさにその意味でご同慶に堪えません。

最後に、セミナーの創設と発展のために尽力された第一回から第二四回にいたる世話人各位、セミナーの育成に助力を惜しまれなかつた小山隆先生ほか同世代の先生方、さらに改革委員会、学会化委員会、企画運営委員会、編集委員会の委員各位に心からの謝意を表します。あわせて、企画と準備が拙ければ翌年のセミナーは開かれまいというかつての緊張感を忘れず、学会であることが保証する持続性に漫然と依存することなく、セミナー時代に勝るとも劣らぬ創意に富む活動を展開して、本会が末長い発展を遂げら